

# 魔闘姫スカーレットの虐胎狂獄

## 触姦年代記

……商業都市ウーゼはエルカテリア北西に位置する。都市の人口はおよそ三〇万人で、諸外国との交易で富み栄えている。人々が行き交う大通りには様々な店が軒を連ねており、ベスタの翡翠細工、ガゾの楽器、ルー王国の絹や茶、ンドンド王国の象牙や香辛料、ゾチヨの白磁や青銅器、シルフィルスの竜涎香、ボゴの琥珀など、各国の珍しい品々が並んでいる。かつてはウーゼという国の国都であったが、エルカテリアの侵攻によってウーゼは滅亡し、いまはかつての首都にその名を残すだけである。

ウーゼには、魔物討伐政策の中心を成す「討伐庁」の支部があった。場所は中央広場に面した北の一面で、地上五階、地下二階からなる赤レンガ造りの建物がそれである。この建物では魔物討伐に関する様々な業務が遂行されており、討伐許可証の発行、人材の募集、魔物に関する情報の提供および収集、成果に応じた報酬の支払いだけでなく、個人や民間団体からの依頼も受け付けている。ゆえに建物は、連日、魔物討伐を生業とする者たちで賑わっており、無数のテーブルが配置された一階の解放フロアには、様々な者たちが集まって、幾つもの塊を成し、それぞれ談話や談笑に興じているのであった。

「この前のクエスト（公的に募集されている魔物討伐のこと）は楽勝だったな。洞窟に棲みついたオーガ討伐だったんだが、蓋をあけたら

少し大きめのゴブリンが相手でよ、へへ、儲かったぜ」

「逆よりはマシだろ。時々、酷い貧乏クジを引くこともあるからな。グラの廃城に関するクエストはかなり酷かったらしい」

「なんだ、その話。聞かせてくれよ？」

「なんだ、知らないのか？　グラの廃城に棲みついた脳食鬼討伐の話なんだが、最初の情報じゃあ棲みついた脳食鬼の数は二、三頭って話だったらしいが、実はもっと数が多くてさ、何組もの討伐隊が返り討ちに遭って壊滅したそうだ」

「ああ、その話、聞いたことがあるな。アゾーんとこの討伐隊もやられたって話だろ、たしか」

「ほう、そうなのか」

「ああ。アゾーのとこはさ、本人以外、仲間を皆殺しにされちまってそうだ。で、アゾーの奴、怒り狂って討伐庁のお偉いさん家に乗り込んだが相手にされず、次の日には首を括ったって話だぞ」

「可哀そうに。だが、ま、殺し殺されるのがこの仕事よ。死んだら終わり、その覚悟がなけりゃスパツと脚を洗うことだな」

「俺はそこまで命かけたくないね。楽して儲けるためにこの仕事に就いたんだ。ドラゴンと戦って大金を得るよりも、ゴブリン殺して小金を稼ぐよ」

そのような会話が形成された塊の各所で交わされている。だが、そんな空気にざわめきが生じたのは正午を少し過ぎた頃だった。

ざわ、ざわざわざわ……。

建物の入り口から入ってきたひとりの人物に、無数の視線が集中した。集中した視線はそのまま釘付けとなり、人物の動向に合わせる形で動いてゆく。

「おい、スカーレットだ」

「魔闘姫さまのお出ました」

その人物は、女性だった。赤い髪を腰まで伸ばした美人で、肌の露出が多いまるでビキニのような装甲を身に着けている。容姿が童顔であるため、首から上の部分だけを切り取って見れば年齢は十代後半と思われる。しかし、彼女の熟れた肉体が、皮肉にもその可能性を潰していた。

ゆさつ、ゆさつ、ゆさつ……。

むちっ、むちっ、むちっ……。

赤い髪の童顔美人が、歩を前へと進めるたびに、大きな乳房がゆさゆさと揺れ動き、尻肉が存在感を強調するように上下する。肌の露出が多いビキニ装甲を着用しているゆえ、その動きは顕著という他ない。なにせ腹部や腰まわりはほとんど剥きだしになっており、胸や股間も極一部しか隠れていないのだ。ほとんど裸同然の格好で、歩くたびに大きな乳房がゆっさゆっさと揺れ動き、尻肉がむちむちとしている様は、もはや露出壁のある痴女が歩いているようにしか見えない。

ただ、胴体部分の貧弱さとは裏腹に、手甲と脚甲だけは過剰なほど強化された装備となっており、そのアンバランスな恰好が彼女の美貌と相まって異質な雰囲気醸し出していた。彼女に対する囁きが各所で発生したのは至極当然のことであつた。

「あ、相変わらずいい身体してやがる。乳と尻を見せつけるように歩きやがって。くうー、たまらねえなあ」

「あ、あの女の人、確かに凄い美人さんですけど、そんなに凄い人なんですか？」

「なんだ、おまえ知らないのか？ スカーレット・バインスターって

いつてな、超一流の格闘家で、超一流の魔物ハンターだよ。トロールでもオーガでもドラゴンでも、どんな魔物も蹴って殴って一撃で仕留めちまう強者さ。この業界に身を置くんだったら、知っとかないとモグリだぜ」

「え！ そんなに凄い人なんですかっ！ た、確かに、その、目のやり場に困る身体してますけど、その、腕は細いですし、そんなに強そうには見えませんが……」

「人を見かけで判断するな。まあ確かに、あいつの腕は細いし、見た目媚婦みたいな身体つきをしているが、だからといって弱いわけじゃない。格闘家としてのセンスは抜群だし、なによりマナの扱いが凄いのさ」

「マナの扱い、ですか？」

「ああ。あいつは身体に桁外れの量のマナを溜めこむことができてな、その溜めこんだマナを使って無双するんだ。莫大なマナを消費して繰り出すあいつの攻撃は凄いぞ。なんせパンチ一発で大岩を粉々に破壊しちまうんだ。大抵の魔物は一発でオダブツよ」

「そ、そんなに強いんですか……？」

「だからそう言ってるだろう。あとな、あいつ、あんな露出狂みたいな破廉恥な格好してるけどよ、あれ、実はわけがあってな、あいつ、魔物をおびき寄せるためにわざとあんな格好をしてるんだよ」

「そ、そうなんです？」

「ああ。魔物の中には人間の女に欲情する種もいてな、そういった魔物による性被害って、実は人的被害のなかでもっとも高い割合を占めているのだよ。で、あいつはそういったエロモンスターをおびき寄せるために、わざわざあんな裸同然の格好をしてるのさ。これも人を見

た目で判断しちゃいけない教訓だな」

「で、でも、あんな姿と格好なら、魔物じゃなくても騙されますよね。おっぱい大きいし、お尻だってあんなにむちむちしてて……」

「勃てるな勃てるな。まあ、気持ちはわからんでもないがな。男なら誰だってあんないい女とやりたいからな。だが、やめとけ。絶対にただではすまないからな」

などという会話が、当人の耳には届かない声量で密やかに交わされているのだった。

同業の男たちが交わす下品な囁きが霧散する空間を、スカーレットは大きな乳房を重々しく揺らしながら、自信に満ちた足取りで進み続けて、ついに目的とした場所に辿りついたのだった。そこは新規の魔物討伐（クエスト）を提供するブースであり、スカーレットはその担当者と顔見知りだった。

「はあい。ランドスター、久しぶりね。元気にしてたかしらあ？」

スカーレットはカウンターに乗り出すように身を傾けると、重々しい大きな乳房をまるで見せつけるようにその上に乗せた。

ランドスターと呼ばれた痩せ型の男は、肉欲のブービートラップと化したカウンターから視線だけを逸らすと、顔に愛想笑いを浮かべつつ、スカーレットの軽口をやんわりと受け流した。

「ええ、私は元気ですよ。スカーレットさんもご息災でなによりです。それで、今日はどのようなご要件をお望みですか？」

「そんなの決まってるでしょう。アタシは魔物をぶっ殺すためにここに来たのよ？ 難易度は高くても構わないし、どんな相手でも構わないから、お金になるクエストはないかしら？」

問われて、ランドスターは言った。

「ああ、それでしたら、このクエストなどはいかがでしょうか。廃城に棲みついた魔物の討伐なのですが」

戦争の時代、エルカテリア各地には、侵攻や防衛の拠点として幾つもの城塞が建築された。平和な時代になってそれらの多くは廃棄されたのだが、空になった城に野盗や魔物が棲みついて問題になることが少なくなかった。

「実は、街道沿いにあるグラの廃城に脳食鬼の集団が棲みついてしまつて、いま困っているのですよ。これまでに幾つもの隊商や行商人が襲われておりましてね、その被害の多さに、ウーゼ政府も頭を抱えているんですよ。これまでに何度も討伐隊が赴いているのですが、脳食鬼の討伐はいまだに成功しておらず、多くの犠牲を出して敗走してばかりなのです。ウーゼ政府としては早期の問題解決を願っておりまして、いまなら報酬が五割増しになっております。このクエストなどはいかがでしょうか？」

報酬は脳食鬼一匹につき金貨一〇枚で、廃城に棲みついた全ての脳食鬼を討伐した場合、別途で金貨三〇〇枚の特別報酬が出るという。

提案を受けたスカーレットは即決した。

「やる」

……と、いうわけで、スカーレットはグラの廃城へ赴くことになったわけだが、この後、彼女の身に起こることに关しては、まだ誰も知る由がないのであつた。

\*

脳食鬼は、その名が示すとおり動物の脳みそを食する魔物である。

かつては「ヤクシ」や「ヤクジャ」などと呼ばれていたが、より具体的にその脅威を強調するために、現在の名前が固着している。

脳食鬼の姿形は直立したアリクイを彷彿とさせるが、大きさは最大級の熊ほどの巨軀を誇り、痘痕面の容姿は醜惡なことこのうえなく、脳を吸るため、ペストマスクのように長く伸びた口から長い舌を出し入れする有り様は、見る者の全身の毛を総毛立たせるほど不快を極めた。腕力も強く、特に鋭い爪は、振り下ろせばまるで刀剣のような威力を発揮して、鉄の装甲すら一瞬で切り裂いてしまうのだった。この鋭い爪で獲物となる人間の四肢を切断した後、耳から舌を挿入し、ゆっくりと脳を吸るのが彼らの食事風景であった。

脳食鬼は人間を積極的に襲うが、その理由は単純で、陸上生物のなかでは人間の脳みそが一番栄養価が高く旨いからである。また、脳を吸られる際に人間が見せる反応も彼らの食欲を刺激するものがあり、ゆえに脳食鬼たちは、しばしば人里近くに集団で棲みついて、人間に多大な被害をもたらすことが多かった。

脳食鬼たちがグラの廃城を根城にしている理由も多くの人間たちが行き交う街道が近くにあるからであり、廃城には現在、三〇頭以上の脳食鬼たちが棲みついていて、その脅威はウーゼ行政府が秘密裡におこなった試算によると、その危険度はSクラス。これは完全武装の騎士団を動員しても排除が難しいレベルであり、事実、これまでに幾つもの討伐隊が出動しては返り討ちに遭って壊滅していた。

その脳食鬼たちが、いま――驚くべきことに、全滅していた。半ば壊れた女神アニの神像が設置された廃城の大広間にて、一匹残らず、その巨体を屍として床に横たえて晒していたのである。

息絶えた脳食鬼たちはまるで輪を成すように折り重なって絶命して

おり、その胸には大きな穴が開いていて、本来、そこにあるはずの臓器が見当たらなかった。すなわち、心臓が抉り取られていたのである。そして不思議なことに、胸の大きな穴からは、一滴の血も滴っていないのだった。

誰が、彼らを殺したのか。

加害者たちは、すでに「出現」した大広間から移動しており、廃城の外に向かって動いている最中であつた。ズルズルという、粘液めいた音を響かせながら。

ズルっ、ズルズルっ、ズルルル……。

廃城を外に向かって移動しているモノたちは、いずれも醜惡な姿形をしていた。それは半ば腐りかけた海洋性軟体生物に似ていたが、とにかく酷い見た目をしていた。

その身体はまるで下水油を集めて固めたようなゼラチン質の物体で、蠢くように這い進むつど、ぬるぬるとした皮膚が蠕動するように規則的な脈を打っている。体色は混濁した茶色で、歪な形の斑模様が幾つも見え、それがうねうねと動いていた。頭部と思わしき部分に大きな目玉がふたつ、ギョロリと浮かぶように生えている以外、他に口や鼻はない。一見、貧民街の下水道に棲息する新種のスライムのようにも見えるが、腐りかけたアメフラシや溶けかけたタコのようにも見えない。とにかく、おぞましい見た目をしており、この異形生物と比べれば、脳食鬼などイケメンの部類に入るであろう。

この新種の腐敗スライムめいた生物の数は三体で、大きさはどの個体も人間の子どものほどの体積であつた。重さも、おそらくは同じくらいであろう。その物体が、ゆっくりと移動しているのだ。粘液めいた



音を響かせながら廃城の外に向かって。

ズルっ、ズルルっ、ズルズルズルルル……。

這いずるように移動する彼らの間では、グチャグチャというまるで咀嚼音のような音が響いている。

グチャグチャグチャ、グチャチャ……。

グチャ、グチャ、ググチャグチャ……。

その醜惡な見た目に相応しい、実に汚らしい音である。全身の肌が泡立ち、背筋が生理的嫌惡感で凍りつきそうになる音だ。耳障りなところのない。だが、この音が、まさか意思疎通をおこなう彼らの「会話」であろうとは、そうと知らなければ誰も気づくことができないに違いない。

ちなみに、彼らが交わす会話の内容を翻訳すると、次のようなやりとりとなる。

「シカシ、酷イ目ニ遭イマシタナ。マサカ時空ノ渦ニ卷キコマレルトハ。オカゲデ本隊カラハグレテシマッタ。イヤア、困ッタ、困ッタ」

「目的トシテイタ時代カラモ遠ク逸レテシマッタヨウデスネ。シカモ時空間カラ出テ早々ニ「害意生命体」ノ襲撃ニ遭ウトハ。低脅威生物ダッタトハイエ、災難ハ立テ続クモノデスネ」

「ソウ言ウナ。助カツタダケマダ幸イトイウモノダ。下手ヲスレバ我々ハ、時空ノ渦ニ捕マツテ、永遠ニ異次元ノ狭間ヲ彷徨ウ羽目ニナッタノカモシレンノダ。ソレヲ思エバ、多少ノ不幸ヤ理不尽ハ享受スベキダロウ」

「不幸中ノ幸イトイウ奴デスカ」

「シカシ、イマハイツノ時代デショウカ。破滅的氷河期ハ、スデニ終ワツテイルヨウデスガ、まなガ薄イ。薄スギマス。身体ヲ動カスノモ

億劫ニナルホドノ薄サデス。コレハカナリ異常ナ時代デスナ」

「確カニ薄イナ。モシカシタラ、コノ時代ノ霸權生物ガまなヲ浪費的消費シテイルノカモシレン」

「調べテミマシヨウ。「保管庫」ヘノあくせす許可ヲ」

「許可スル」

許可を受けた個体が触手を動かすと、空間に光り輝く板状の紋様が浮かんだ。半透明で、向こう側が透けて見える。それを触手を使って操作すると、歪曲的文字が羅列となって浮かび上がり、この時代の情報を掲示してゆく。彼らが扱う文字や文法に変換されて。

それは魔法の一種であった。この世界には、より高い次元に森羅万象の全てが記録された「保管庫」が存在しており、そこにアクセスすることができれば、全て（あるいは断片的に）ではないにせよ、たとえ見聞きできずとも必要な情報を入手することができるのである。人間が扱う魔法とは比べ物にならない。より高度で繊細な魔法だ。それを、彼ら醜惡なスライム生物は、まるで呼吸でもするかのようにいとも簡単におこなっているのである。彼らはいったい、何モノであろうか。

「判明シマシタ。イマ、我々ガイルコノ時代ハ、チョウド一〇〇〇万年後ノ未来デスネ。後ノ表記デ「旧新星代」ト命名サレルコトニナル時代デス」

彼らは「ゾス」といった。この惑星に出現した最初にして最古の知的生命体であり、その醜惡な見た目からは想像もつかないような高度な知識と技術を有して超高度文明を形成した生物である。破滅的な氷河期の到来を予見して、種を存続させるべく、後に出現するすべての文明が消え去った二〇〇〇万年後の世界に移住すべく、種族をあげて

時空間移住をしている最中であつた――が、いま、この時代に現れた三体は、不運にも、時空の渦に巻き込まれ、図らずもこの時代に現れてしまったのだつた。

「一〇〇〇万年後ノ世界、カ。半端ガ過ギルナ。セメテ一八〇〇万年後ノ世界デアレバ「冬眠」シテ本隊ノ到着ヲ待ツコトガデキタノダガ。一〇〇〇万年ハ、少シ長スギル」

「冬眠シタラ、ソノママ干カラビテシマイマスネ」

ゾスたちは魔法の他にも様々な能力をもっているのだが、決して万能ではなく、どの能力にも限度というものがあつた。休眠状態で超期間を無代謝状態で過ごす「冬眠」も、せいぜい一〇万年が限界であつて、魔法の補助があつてようやく二〇〇万年というところである。一〇〇〇万年も冬眠したら、さすがに目覚めるのは不可能だ。時間を超越することが可能なゾスであっても、死者蘇生という魔法がまだ開発できていない現状では、冬眠を選択肢とすることはできない。

「ソレデ、まなノ濃度ガ薄イ理由ハ判ッタノカ？」

「エエ、判リマシタ。ドウヤラ、コノ時代ノ覇権生物デアル「人間」トイウ種族ガ消費シテイルヨウデス。ソレモ、ガンガント」

「ガ、ガンガン使ッテイルノカ？ まなヲ？」

言われたゾスは驚いた。大きな目玉をさらに大きく見開いて。

「ハイ、ソレハモウ、ガンガン使ッテマスネ。ガンガント。コノママ使イ続ケタ場合、一五〇〇年後ニハ世界ノ環境ガ悪化シテ大変ナコトニナルレべるデ使ッテマス。イヤ、本当ニ酷イ消費ノ仕方デスヨ」

「……ドウヤラ愚カナ生物ガ覇権ヲ取ッテシマッタヨウダナ。嘆カワシイコトコノウエナイ」

「トハ言イマシテモ、我々モまなヲ使イ過ギタセイデ破滅的冰河期ヲ

招イテシマイマシタカラネエ。他人ノコトハトヤカク言エマセンヨ」

「ソレハ言ウナ」

マナは無尽蔵に存在していると思われがちだが、実は違う。確かにマナは自然界に大量に存在するのだが、その量には限りがあって、減少すれば世界の環境に大きな影響を及ぼす。超高度文明を築いていたゾスたちはそのことを知っていたが、それでも「便利な生活」を止めることができず、破滅的冰河期を招いてしまったのだった。

「ソレデ、コノ時代ノ覇権生物「人間」トハ、ドノヨウナ生き物ナノダ？」

「ソウデスネ……ア、チョウドイマシタ。アレデス、アレ。アレガ「人間」デス」

そう言ってゾスの一体が触手で指し示した方向に、「人間」がいた。名を、スカーレット・バインスターという人間の女が。ゾスと人間という、本来であれば決して交わることのない種族同士のこれがはじめての会遇であった。この会遇が、どちらにとって不幸であったかについては、歴史はまだ語らない。

スカーレット・バインスターが手を腰にやりながら首を傾げた。

「なに、こいつら？ 気持ち悪い生き物ね。新種の魔物かしら？」

これまで数多の魔物と戦ってきたスカーレットにとってもゾスは初めて遭遇する存在だった。一度、足を止め、彼らを不思議そうな目つきで眺めやる。見た目といい、大きさといい、危険度は低そうだとゾスを見やるスカーレットの目が語っていた。

現れた「人間」を観察するのはゾスたちも同じだった。ゾスたちは、立ち止まった「人間」を大きな目玉で見上げながらまじまじ観察すると、不快な咀嚼音めいた音でもって、感慨深そうな口調で語り合った

のだった。

「コレガ「人間」、カ」

「我々が居タ時代ニハ存在シナカタ形態ノ生物デスネ。形状的ニ「それ」第三惑星「てら」棲息ノ知的生命体ニ酷似シテオリマス。我々が不在ノ間ニ、恒星間移住デモシタノデショウカ？」

「カモ知レン。奴ラ、仕切りニ外宇宙ヘノ進出ヲ模索シテイタカラナ」

「コノ個体ニ関スル情報ノ詮索ハ必要デスカ？」

「無論。タダシ、断片的デイイ。「保管庫」ヘノ接続ニハまなヲ使ウカラナ」

森羅万象が記録された「保管庫」から情報を得る魔法は大変便利であるのだが、「保管庫」は高次元に存在するため、そこにアクセスするだけでも膨大な量のマナを消費し、得る情報量によつてはさらに多くのマナを消費することになる。マナが不足している現在の状況では多用できる魔法ではなかった。

「承知シマシタ。保管庫ヘノあくせす許可ヲ」

「許可スル」

「「保管庫」へあくせす——詮索開始」

ちなみに「保管庫」へのアクセスは、方法と許可を同一個体が有しなくてはならないという決まりになっており、方法を有する個体は、許可がなければ自らの意思で「保管庫」にはアクセスすることができないのだ。それにはむろん、理由がある。

「——詮索、完了シマシタ。個体識別名・すかーれつと・ばいんすたー。性別・雌。生体年齢・二十一。状態・処女。ばすと・一〇一、うえずと・五六、ひつぷ・九十三、種族・ほも・さぴえんす。惑星てら棲息ノ高度知的生命体トノ遺伝子適合率九九・九九二八ぱーせんと。出身

及ビ経歴ハ――」

「イヤ、ソコマデデイイ。問題ハ、我々ニトツテノ脅威度ダ。危険指数ハ幾ツダ？ 外惑星種族トナルト、危険度ハ高イハズダガ？」

すぐに危険指数が計測された。これはわざわざ「保管庫」にアクセスするまでもなく、魔法で測ればすぐに判る。

「危険指数、計測――出マシタ。個体脅威度ハ〇・〇〇三。先ホドノ群体生物ヨリハヤヤ高メデスガ、問題ニナラナイ数值デス」

「ソウカ。ナラ、無視シテ構ワナイナ」

「イエ、ソレハ早計カト。計測ノ結果、コノ個体、体内ニカナリノまなヲ蓄エテオリマス。生体情報が不足シテイルタメ正確ナ計測ハ難シイデスガ、簡易計測ニテ算出サレタ推定保有量ハ一二〇万跳躍量ニ及ビマス。」

ちなみに、一跳躍量は、一年先の未来世界に時空跳躍するために必要なマナの量であり、一二〇万跳躍量となると、それはそのまま一二〇万年後の世界まで時空跳躍することが可能な量であることを意味している。それは驚異的な量であり、事実、指摘を受け、自ら計測したゾスは驚きを隠せなかった。

「本当ダ。コレハ凄イ。サスガハ外惑星種族トイッタトコロカ。驚イタ」

「シカシ、セツカク膨大ナまなヲ蓄エテイルニモ関わラズ、ホトンド活用デキテイナイヨウデスネエ。溜メルノハ得意デモ、使ウノハ苦手ナノデショウカ」

「ダガ、我々ニトツテハ幸イダ。コノ個体が有スルまなヲ回収デキレバ、カナリノ跳躍ガデキソウダ」

「デスガ、ソレハ難シイカト。肉体トまなノ結びツキが強固ナタメ、

回収ニハカナリノ手間ト時間ガカカルカト思ワレマス。強引ナ回収ハ、対象ノ生命ニ危険ヲ及ボシマス」

「ナラバジックリ行コウデハナイカ。ナニ、時間ハタツプリアルンダ、焦ル必要ハナイ」

などというゾスたちのやり取りは、人間の耳にはベチャベチャという汚らしい音にしか聞こえない。意味は不明だし、耳障りなことこのうえない。ゆえにスカーレットの反応は、最初から嫌悪と不快に満ちたものであった。

「なに、こいつら……ベチャベチャ変な音を出して。気持ち悪いったらありやしないわ」

警戒心を高めるでもなく、ましてや臨戦態勢を取るわけでもなく、いたって力を抜いた態度で、スカーレットは蔑むような目つきでゾスたちを見下した。

スカーレットにとってゾスたちのやり取りは、石の下で蠢く小虫の動向と同義だったに違いない。不快で汚らしい。生理的にも受け付け難く、見ているだけで虫唾が走る。ゆえに、本来であれば未知との会遇であるにも関わらず、警戒心を抱くことなく相對することができたのであった。ゆえに、彼女の愚痴めいた内心の吐露は、相手に聞かれなくても構わないといったいでなおも続いている。

「ホント、見れば見るほど不快な見た目をしているわね、こいつら。奇形のスライムかしら？ それともナメクジの変異体？ どっちにしても、吐きそうなくらい気持ちの悪い生き物ね」

ゾスたちに対して吐かれるスカーレットの侮蔑の言葉は、すべて、人の言語によって音声化された発語表現であった。当然、通常であればゾスたちも理解することはない。しかし、悪意というモノは不思議

なもので、意志疎通が困難な種族間であっても、悪意や敵意という概念は、目には見えない波動として相手に伝わってしまうモノらしい。スカーレットの怪訝な態度を見て、ゾスたちは訝しんだようだった。彼らはすかさず、スカーレットが発した言葉の意味を詮索した。

「コイツ、ナニカ言ッテイルナ。良い言葉デハナサソウダガ、ナント言ッテイルノダ？」

「翻訳シマシタ。ドウヤラコノ個体、我々ニ対シテ生理的嫌悪感ヲ抱イテイルヨウデスネ。イワユル「悪口」ヲ吐イテイルミタイデス」

別のゾスが補足の言葉を続ける。

「ドウモコノ「人間」トイウ生キ物ハ、物事ヲ判断スル際、見タ目ノ美醜ヲ重視スル傾向ガ強イヨウデスネエ。特ニコノ個体ハ、ソノ傾向ガ顕著デス。深層心理ヲ探ツタトコロ、過去ニ心的外傷疾患ヲ患ウ出来事ニ遭遇シタコトガアルミタイデス」

「フム、見タ目デ物事ヲ判断スルノカ。愚カナコトダ。感性ヲ判断基準トスルト、致命的ナ誤解ヤ誤認ヲ招クト知ランノカ？」

「ドウヤラソノヨウデ。ソノ証拠ニ、コノ個体、我々ノコトヲ自分ヨリモ弱イト思ッテイル節ガアルヨウデスヨ」

「ナンドト？」

「ト、イウコトハ、ツマリー」

不吉な予感を覚えたゾスたちがそこまで言いかけた時だった。ブワッ、という熱波にも似た衝撃が放たれたかと思った次の瞬間、突然、スカーレットの身体から湯気のような闘気が立ち昇りはじめたではないか。体内に蓄えていたマナを一気に放出して戦闘態勢に入ったのだ。「まあいいわ、こんな醜い化け物、サクッと殺っちゃえばそれでお終いなんだから。脳食鬼と戦う前の準備運動として、馬車に引かれたカ



エルみたいにぺちゃんこに――」

スカーレットがそこまで言った時だった。ゾスの一体が、まるで杖を振るように触手で空中を軽く掃いた。ベチャツ、という声がした。

「意識遮断、思考強制停止」

その直後だった。

ブツリ。

「――あ……」

突然、スカーレットの視界が真っ暗になった。それと同時に意識も途絶え、全身から力が抜けた。そしてその直後、彼女の身体は半ば崩れるようにしてその場に倒れてしまった。どさっ、と音を立てて。

目を見開いたままぴくりとも動かなくなったスカーレットの周りに三匹のゾスたちが集まってきた。グチャグチャという咀嚼めいた声が木霊し響く。

「敵意ヲ確認シタタメ、対象ノ意識ヲ強制停止サセマシタ」

「野蛮ナ……知的生物トハ思エヌ振ル舞イダ」

「コノママまな回収ニ以降シマスカ？」

「ウム。回収ノ最適方法ヲ探ルタメ、「保管庫」ヘノあくせすヲ許可スル」

「了解シマシタ。「保管庫」ヘあくせす――詮索開始」

繰り返しになるが、高次元に存在する情報の「保管庫」にはこの世界に関する森羅万象の全てが事細か詳細に記録されており、ゆえに、最適解を導きだすにこれほど便利なことはない。

だが、全ての情報を調べてはいけない。

出来ない決まりになっている。

出来ることはできるのだが、ダメなのだ。

なぜならば――世界はすべて、最終的には「無」に帰すからである。

つまり、全ての行動や行為が「無駄」であることは、「保管庫」にアクセスが可能になった時点で、すでに証明されているのである。ゆえに「保管庫」へのアクセス許可を持つ者と方法を持つ者は分かれていたのだ。ゾスという種が、存在を保ち続けるために――。

「――詮索、完了シマシタ。原始的ナ方法ニナリマスガ、まな回収ニハ、身体ヘノ加虐行為ニヨル刺激分泌法ガ最適トノ結果ガ導キダサレマシタ」

「身体加虐カー――アマリ氣が進マヌガ、仕方アルマイ。ヨシ。対象ノ全身状態ヲ把握シ、身体構造及ビ各種臓器ノ状態ヲ掌握セヨ」

「承知シマシタ。実行ニ移シマス」

そう言って触手を動かした。意識を集中させるでもなく、ましてや呪文を唱えることもなく、呼吸をするように魔法が発動し、オレンジ色の光がスカーレットの身体を包み込んで彼女の身体構造を把握してゆく。把握されたスカーレットの身体状態は、光輝くパネルに立体的に表示され、そこにゾスたちのみ理解できる文字で状態が記述されてゆく。

「全身状態ノ読ミ込み開始。身体構造把握、各種臓器状態把握、脳波状態把握、推定体力把握――加虐ニヨル突然死ヲ防グタメ、身体ニ第二種防護魔法ヲカケテオキマス」

第二種防護魔法とは、いわゆる回帰魔法のことであり、肉体が損傷しても、自動的にそれを修復する大変便利な魔法である。ただし効果は永続的ではなく、短期間（それでも数週間は効力が持続するが）のみ効力を発揮する限定魔法だ。

「ウム。ソレト、加虐ノ途中デ抵抗サレテハ面倒ダ。運動神経ハ全テ

遮断シテ、全身麻痺ヲ標準化セヨ」

「了解シマシタ。チナミニ、感覚ハ？」

「感覚ハ残セ。抵抗ノ反応ハ「声音」ノミ許可スル」

声や言葉には、それ自体に身体状況を伝える場合が多々あり、それは魔法を使うことなく情報を収集できる貴重な情報源であった。

「承知シマシタ。中枢神経遮断、抹消神経遮断、各所可動神経遮断、遮断、遮断、切断――」

光輝くパネルが操作され、スカーレットの神経系統が次々と切られてゆく。ただし、実際に神経が切断されたわけではなく、脳から送られた電気信号が遮断されただけである。しかし、効果は絶大で拔群だ。この遮断により、スカーレットは、手も、足も、指一本すらも、もう二度と自分の意思では動かせないし、刺激による反射や反応でも動くことはない。肉体の感覚だけが残された状態にされてしまったのだ。そう、まさに自我を持つ生きた肉人形にされてしまったのである。

「アアソレト、コイツガ身ニ付ケテイル「殻」モ全テ排除セヨ。刺々シイコトコノウエナイ。加虐ノ際ノ邪魔ニナル」

「了解シマシタア。「殻」、剥キマアス」

そう言ってゾスの一体が無数の触手をスカーレットに伸ばした。ずるずるっ、ずるるる……。

ガシャガシャ、ベキッ、バキ、ビリリリ……ッ。

まるで甲殻類の殻を剥くように、スカーレットが身に着けていた装備や下着を剥いでゆく。手甲が外され、脚甲が破壊され、ビキニのような甲冑が引き千切られた。絹製の高価な下着も、乱暴に破り捨てられた。

ほどなくして、スカーレットの白い裸体が露になった。人の頭ほど

大きくずっしりと重々大きな乳房が、当人の性格を反映しているかのごとくツンと尖っている綺麗なピンク色の乳首が、無駄な脂肪が一切付着していないほっそりとくびれた腰が、まだ陰毛が生えておらず生まれたばかりの赤子のようにつるつるしたアソコが、ぶにぶにの恥肉が丘のように盛り上がった股間が、肉づきのよいでっぷりとした大きなお尻が、なにかも剥き出しの丸裸にされてしまったのだ。

それは同族たちにとってはまさに垂涎の豊満な美肉体と言える代物であつた。乳房も、臀部も、汚れひとつない白い肌も、思わず舌を這わせたくなるほど綺麗なアソコも、まるで神の手によって生み出された一級芸術品のような肉裸体である。なんと見事で、なんと熟れた肉体だろうか。処女の守護者にして、妊娠と出産を司る女神アニを彷彿とさせるほど見事な裸体であつた。

だが、生物学的に異なる種族のゾスたちにとってスカーレットの裸姿は、エビやカニの剥き身と大差のない代物であつた。例えるならば、そう、人間にとって海老や蟹の剥き身のようなものだ。海老や蟹の剥き身がどんなに見事であつたとしても、人間がそこに性的価値を見出すこと（甲殻類に欲情する変態はいるかもしれないが）はない。人間にとって海老や蟹の価値がその旨味にあるように、ゾスたちにとってスカーレットの肉体的価値は、蓄えられた莫大なマナにあつた。ゆえに、ゾスたちは、スカーレットの全裸を見ても、感嘆の息を吐くこともなく、また感心するわけでもなく、淡々とマナ回収に必要な作業だけを進めてゆくのだつた。

「全身麻痺確認。全テノ施術、完了シマシタ。意識再稼働マデ、五十秒、五十一秒、五十秒……」

「ヨシ、吸収還元壁ヲ構築セヨ」

「了解シマシタア。法式構築、領域展開——マナ吸収還元壁、展開開始」

ピキッ、ピキピキキキ……。

まるで氷が張るような音を立てながら、スカーレットとゾスたちを中心に薄い紫色の半透明状の球体壁が構築されてゆく。スカーレットから放出されるマナを吸収し、それをゾスたちに還元する魔法結界である。

「ヨシ。ソレデハ諸君、始メヨウカ。コレヨリ、まなノ回収スル」

「ハッ」

ズルズルと粘液質の音を立てながら、責め苦を与える役目を担ったゾスがスカーレットに近づいた。

——先にも述べたが、ゾスたちの精神構造は人間よりも昆虫に近い。効率をなによりも重要視し、感情や感傷に行動を左右されることもなく、ただただ、目的を達成することを目指して行動する生物なのだ。それがどれほど恐ろしいことか、この後、スカーレットは身をもつて体験することになる……。

……続きは本編でお愉しみください。